
三色パン 2色目

戸木田 宗次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三色パン 2色目

【Zコード】

N4103BA

【作者名】

戸木田 宗次郎

【あらすじ】

どうして誰も教えてくれなかつたんだ。

Hをするよりキスをするほうがよっぽど大変だつてことを・・・。

この人間には全く無関心で視界に入れていない名前の無い町の中で

今日も何かが起きている。

ラブホテルで、授業中の教室で、倉庫の中で、川の中で・・・?

まあ、なんだ。

ゆるくないゆりは、痛いだけだよ。

裏切りの美德

2色目

『裏切りの美德 1』

どうして誰も教えてくれなかつたんだ。

Hをするよりキスをするほうがよっぽど大変だつてことを・・・。

この人間には全く無関心で視界に入れていない名前の無い町の中では絶滅危惧種の少数派人種がいる。

それを他の一般的な世の中では『ストーカー』と呼ぶそつな。

まあ思い返せば俺がいた中学校は男子中だった。性に敏感なお年頃だと

いつに、毎日毎日

顔を合わせるのは野郎だけ。

しかも酷いことに学校には男の教師しかいないため、全てにおいて暑苦しい中学生時代を送られた。

しかし中学生の性に関する興味は並々ならぬモノがあり、

耐え切れない奴らはよく同級生を体育倉庫や放課後の教室で襲つては

溜め込んだ熱を襲つた生徒の中へぶちまけた・・・とかいう噂もあつたが、どうなんだろう。

ただ、まあ同じ男子中学生でありながら異様に女のような顔立ちをした奴や、普通の顔して全身から言葉に出来ないフヨロモンのやうなものを醸し出していた奴もいたし、もしかしたらもしかするのかも。現に、俺の真後ろにはそういう事例の奴が一人付きまとっているからな・・・。

「・・・」

「・・・」

なにしてんのあの人・・・。

「まとい纏伊・・・何か用?」

「・・・」

俺の問いに纏伊は首を左右に振る。ていうか用が無いなら後ろについて回るのやめて貰えないでしょうか。

「纏伊、違う高校だろ？方向逆だよな」

「・・・・・つ・・・・・つ・・・・・

何だつて？

「・・・・・ぶ・・・・・文遠・・・・・つて・・・・呼・・・・んで

「・・・・・

俺の話は無視か。

「・・・・・つ・・・・・つ・・・・・つ

「何？」

「・・・・・き・・・・・めお・・・・・氣をつけ・・・・て・・・・

「何に」

「・・・・・つ・・・・・つ・・・・・

「ス・・・・ストオー・・・・カアー・・・・

それはお前だろ？

「あー・・・・分かつた分かつた。じゃあストーカーに氣を付けるか
ら、

纏伊はさつさと学校へ行けよ

(訳・俺から離れろよストーカー野郎)」

挨拶でも言ひてんのか？はあ・・・もう付き合ひでらんねーな。

いやあな、纏伊！俺はこれから嫁さんを迎えて行くんで！」

• • • ! ! ! !

纏伊の表情が強張った。やはり「俺の嫁さん」というフレーズに

相当な打撃を受けたようだ。

まあ、当然だろ。俺の嫁さんは3枚の御札並みに強くてそして・・・

そして何よりかわいいんだからな！

デ
ヘ
ヘ

気持がよくなつた俺は纏伊を無視して嫁さんの自宅へ向かつて走り出す。

あいつも所詮はいち高校生。

登校時間になれば嫌でも自分の学校へ行くだろ？

ああ・・・今日も爽やかで清々しい朝だ。待つていてくれよな、

俺の嫁さん！！！

「・・・・つ・・・・よ・・・・嫁・・・・嫁は・・・・げ・・・・

元凶・・・う・・・うう・・・

「殺つつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ

今日も最悪だ。早く最高な日を迎えてい。

電柱の後ろに隠れてブツブツ喋っている気持ちの悪い奴を見かけた。

そう思いながら、私は学校の反対方向へ歩き出す。

裏切りの美德

2色目

『裏切りの美德 2』

小学校時代、保健体育の先生（女）が女子に向かつて言つていた。

「口でさせてくれと強請るような男は碌な奴がないから、そんな奴の言つことは

聞いてはいけない」と。

先生・・・あれから数年、俺は碌でもない男になりました。心だけ。

嫁さんはクラスが違うので、授業中は退屈極まりない。

こういった町だから授業中誰かが教室から出て行つても教師は何も言わないし、

教師もただ教科書を読み上げているだけで勉強を教えようつて気など初めから

持ち合わせていないといつ学級崩壊の前に既に根本から崩壊してい る俺たちの学校。

この町にある学校はどうにもそうだ。

みんな、ただ「行くよ」、「と書かれてるから学校へ行き」「教科書の内容を

教えるように」「言わされたから教科書に載つてあるそのままの文章をそのまま

読むだけの教師の授業を言われた通りに受け時間になれば家へ帰る、

そんな決められたレールの上だけを歩くだけのような生活を送っている。

俺は勉強がそこまで嫌いではないので教師の音読はBGMとして聞きながら

通販で購入した参考書などを勝手に授業中に開いて問題を解くのが
田課。

「おい、弟塚」

声を掛けられたので顔を上げれば同じクラスの……えっと……
なんとか

文則……? が

俺の席の前に座っていた。

あれ、俺の前の席って違う奴じゃなかつたっけ?

「なんだよ。俺今忙しいんだけど」

「金貸してくんない?今日、弁当忘れちゃって」

「悪い。俺、今月色々と厳しいから他人に貸す金は持つてないんだ」

「そつかー・・・残念。じゃあ他の奴に頼むわ」

そつまつてなんとか文則は授業中にも関わらず部屋の中を歩き回つ、

クラスメートに金の無心をしていた。

はあ、こんな状態でも教師は何も注意をしない。

本当にこの町はつづく人間というものが視界に入つていないのでな。

ふと窓際のほうに田をやると一番後ろの席に座つている男子が女子を膝の上に

乗せながら舌と舌でレロロロしながらトイープな接吻を無我夢中でしていた。

見せつけか?見せしめか?ああ??

・・・はあ・・・俺もあんなキスをしてみたい。

「・・・嫁さん・・・」

シャーペンを置いてポケットから携帯電話を取り出して嫁さんへお誘いのメールを

送つてみる。

『午後、学校を抜け出さないかい?』

数秒後、嫁さんから返信。

『じゃあ迎えに来て』

「OK、OK。全然OK」

直ぐに返事を打ちメールを嫁さんへ送信。

はあ・・・の胸のもせもせを晴らすには、やはり嫁さんの身体に限る。

今日も思う存分、青少年的不健全性行為をしようではないか・・・
グフフ・・・。

「・・・ん?」

携帯電話の振動に気付きメールボックスを開いてみると、嫁さんからもう一つ通

メールが届いていた。

『あ、クラスにはいないから。屋上でみんなと集会しているので屋

上に迎えに来てね』

「・・・」

愛おしい嫁さんからの返信メールも『みんな』といつフレーズを見ただけで、

メールから果たし状へ変わったような気分だ。

はあ・・・またあいつらに会わなければいけないのかと思うと、胸
が苦しい。

月曜日が来て騒ぐ社会人の気持が今ならちょっとだけわかる気がした。

裏切りの美德

2色目

『裏切りの美德 3』

愛しそぎるのってよくないよね。だからさ、勘違いしちゃいけない。愛する君の好きな人を殺しても、君はその人からの愛を貰うことには出来ないよ。

この町は人間にとってはとてもなく不条理な町だ。

俺の親の様に自殺か他殺か分からぬ遺体がでたとしても、誰も何も調べない。

ただ「死んだ」という結果が残された俺たち兄弟に差し出されただけ。

それでおしまい。

路上で遺体が何体も倒れていたとしても、みんなそれに何の感情も抱かず横を

平然と歩く。

それでもいい加減邪魔だな、と思われたら業者に頼んで回収されていき

そのまま消去される。

『まるでテーターのようだ』とか思つた時もあつたが、これがこの

町の日常風景

なのだから結局みんな、何の疑問も抱かずに生きていく。

正しいか正しくないかなんて、そんなのどうでもいいんだ。

この町の女性はみな生まれた時から護身術や武術を教え込まれている。

なんせここまで治安が悪いのに平然を装う町だ。女性特有の事件に対する被害率も

相当な数があり、それでも誰も助けようともせず事件を放置しているのだから

年々被害者は増え町から女性は姿を消していく。

もちろん、それが町を出たのか故意に消されたのかは誰も知らないところだが・・・。

そんな女性たちの駆け込み寺的なものがひさの高校には1~3年生、全ての学年に

存在する。

まあ言つまでも無く、その総指揮者が君ヶ主3姉妹だ。

「あ、うんこー！」

屋上に来て掛けられた第一声がうことか・・・。

「誰がうことだ、ここの小便女…！」

下品な言葉には下品な言葉でお返しですわよ。

「なにそれー、反撃のつもり? マジで意味わからねえ」

「最初に仕掛けたのはお前だろ? が…!」

「はっ、うんこ呼ばわれされて怒つてんの? だって弟塚の名前つてさー雲長でしょ。」

だから、雲長 うんちゅう うんちゅう うんち ウンロー。」

「お前の方が意味わからねえよ」

人のことをうことひことひと言つてくるのくせつ毛短髪女の名は

『典型的な末っ子』 翼徳。

こんな奴なのに俺の嫁さんはこいつのことをメチャクチャ氣に入つていて

『人類が滅亡する寸前に最後の晩餐として翼徳のお肉を食べたい』
とまで

言わせるほど。

なので毎日罵り合っている訳だが、決して仲は良くない。本当に。

「何か御用?」

声を掛けてきたのは前後両方の黒い髪の毛が尻の長さまで伸びている

『完璧女』・子龍。

ここでの表情は前髪のせいで全く見ること出来ないが声色からして
気が立つてそうだった。

「悪いな・・・俺と嫁さん、これから授業をサボるんで。

君たちとはここでお別れ」

「成程。完璧な私が導いた完璧な答えとして、あなたと玄殿はこれ
から

商店街の狭間にあるラブホゾーンへ向かう気ね」

「ノーロメントで」

ドンペシャなお答え、どうもありがと!。

「・・・あ・・・あなた・・・玄徳になんかするんでしょう・・・
!..」

ガタガタと震えながらこちらを睨み付ける金髪縦巻きロールの包帯女

『極度の被害妄想者』孟起。

「まさか。俺は嫁さんを愛しているんだぜ？」

そんなことするわけないだろ。な？」

何となく誰かに同意をしてもらいたくて孟起の隣にいる『殺し損ねる女』文長と

『流浪の勇者』漢升に声を掛けたが、一人はあやとりの真っ最中で話など最初から

聞いていないようだ。なんともはや・・・

「じゃあ今日はしないの？」

彼女が声を出した瞬間、あやとりをしていた一人は手を止め震えていた人は

震えを止めて、全員が姿勢を正す。

ただ一人、俺だけは姿勢を正すことも無いまま声を発した主の元へ近づいていく。

「嫁さんはどうしたいの？」

「私はしたい」

「じゃあ、そうこうする

「うん

頷き、嫁さんが立ち上ると銀髪のハーフツインが可愛く揺れた。

今田も可愛い俺の嫁さん。手を差し伸べると美しいエメラルドグリーンの爪がそつと

俺の手の平に触れたから、俺はその手が離れないよう力強く嫁さんの手を握る。

「じゃあみんな、今日はいいで解散

嫁さんの指示に全員無言で頷く。

さつきまであんだけ馬鹿なことを言っていた翼徳も今だけは真剣な表情を浮かべて

頷いている。

そんな若干重苦しくなった空氣に耐え切れず、

俺は嫁さんを連れて学校を途中で抜け出した。

今日も嫁さんじやんぱくがちゅうじゅう。

裏切りの美德

2色目

『裏切りの美德 4』

俺の性根は腐っているから。いつも表情を表に出さない子がある日突然一瞬だけ

見せた笑顔より、醜いくらいに顔を歪めたその子の姿を見た時の方が断然

興奮する。

平日、午後、商店街の間に建つ古びたラブホテルの一室。

薄暗い部屋の中には風呂とベッド、そして革製のチーン付き手枷と足枷がある。

まあつまつそういうフレイ専用部屋、そこに俺と嫁さんは居た。

二人とも生まれたての姿で俺の身体の上に嫁さんが乗っかりやすやすと寝息を

たてている。とてもかわいい姿だ。

俺の嫁さんの身体は言つちや悪いが細すぎる。女性らしい肉のふく

よかさが無く、

まるで少年のような華奢な身体つきをしていてプラス肌の白さも相まって生気が

全く溢れてこない身体をお持ちの人だ。

大抵のキャラ男はこの見た目だけで俺の嫁さんを『中の下』と評価を下しているが

全く奴らは分かっていない。

「・・・んん・・・」

まだ夢の中にいる嫁さんが動く。

その度に俺の胸板には嫁さんの大きな一つの膨らみがタップンタップンと当たる。

・・・うん・・・うん、・・・凄く・・・凄く柔らかくて・・・大きい膨らみ

なんだな、これが。

「・・・嫁さん・・・」

眠る頬にそっと触れてみる。まだ熱が引かないのかまだ頬が少し赤い。

「・・・」

頬に触れていた指をゆっくりと動かして柔らかなピンク色の唇を歌詞の様にそつと

指でなぞつてみた。

瞬間、嫁さんの身体が少し震える。可愛い、本当に可愛い。

「・・・・・」

だから勢いに任せて嫁さんを両腕で強く抱きしめながら身体を反転して嫁さんを

組み敷き、唇に軽いキスをした。

問題ない。

だから興奮してこぎ唇を深く重ねて舌を強引に忍ばせたといひ、俺の舌は

容赦なく噛みつかれた。

いや、これは噛みつくところか・・・・食われようとしている。

「び・・・・びにしつつ・・・・・・・・」

上下の歯に挟まれた舌を引っ込もうとするが嫁さんの噛む力の方が強すぎて

一向に抜けない。

「べええつ・・・・・べえつ・・・・」

俺は今最高に情けない顔を晒してこる。だがそんなこまかえにひたあじりでも

うめき声、これほマジで俺の舌が膾にむちられてしまこそうな予感。

え？俺の舌は食われやつの？牛タンと違つたよ？

「びつ・・・・・びえ！・・・・・」

口を開けすぎて顎が痛くなつてきた。

だらしなく垂れた涎が嫁さんの唇に当たつんピンク色の唇が更に艶やかになつている。

ああ・・・・・凄く欲情しきやうんですけどーなんで俺馬鹿みたいに舌出しちゃ

はあまあしきやつてんの？

どんなに顔を上げても舌を歯から抜け出せず、両腕で口を開こうとしても

全く微動だにしない

(ていうか開かねえ・・・・・)

「まめに・・・・・まめにまお・・・・・」

舌の痛みが徐々に強くなり何だか鉄の味までしてきたもんだから、さすがに俺も手段は選べなくなつてきただ。

「・・・ばべん・・・ばべばん・・・」

嫁さんに一応の謝罪。

嫁さんは全く何にもしないのにね。ただ嫁さんはいつもの習慣で口の中に入ってきた

人間の部位は何でもご飯だと勘違いしちゃう、腹ペコさんなんだよな。

それを知つて舌を突っ込んだ俺はただの命知らずの若き色欲魔。

だから・・・だから本当に誠に勝手ながら失礼いたします。

「・・・」

俺は顔を降ろすと、円を描くように両腕を動かし口の胸板の下へそつと腕を忍び込ませ、

そしてやんわりと赤子に触れるような優しい動きで手の平を降下させて大きな大きな

一つのお山を包み込むと、親指と人差し指の距離をゆっくりと縮め

ていき、

指の間に挟まれた二つの口の小さなピンク色のお家。ではなくて、
ピンク色の小さな丘を一本の指でじりくりと摘み上げそして勢い
よく弾いた。

「ひ・・・・・・・・」

嫁さんの身体が震え、一瞬だけ口が開く。

その隙に俺は全速力で顔を上へあげて上下の歯で噛まれていた舌を
なんとか救出。

助かつた・・・助かつたよ俺・・・。

込み上げてくる来る涙が頬を伝つ。

今の氣持を表すなら海洋パーク映画ドラスト30分前ぐらいにい
きなり船に

波が押し寄せてきて「うわーーーーー」と叫んだまま消息不明、司令
塔にいた人間全員が

「死んだ」と思い塞ぎ込ん出るといひにモーターから流れる俺の声
と共に壮大なBGMが

流れ出す。

そんな映画のワンシーンのような気持だった。

うん、メチャクチャ分かりずらくて大変申し訳ないのだが。

「…………？」

「たま」

気が付けば嫁さんが目を覚ましていた。しかも少し頬が赤くなつて
いる・・・。

「あ・・・いや、あの・・・これは・・・」

「私は、雲ちゃんの上で寝ていたと思つたんだ、けど、

おかしな日本語を叫びながらその場で土下座を決める俺。

しかし何でナイスハプニング。頭を下げるところは大きなお山の山間部で顔が

大きなお山に挟まれちゃつてるう！げえへへへへ。

「夜這い？」

「違つたよ……」

突拍子もない発言をされたしまったので否定するため直ぐに顔を上げてしまった。

俺はなんて馬鹿なんだ。

「でも、私、また雲ちやんの下に……」

「あ……いや、これは違うんだ。実はせつを嫁さんが寝返りを打つて、

そのままベッドから落ちそうになつたから受け止めようとしたら……

まあこんな感じになつ……ちやつ……て……」

自分で喋りながら話の展開があまりにも「都合主義過ぎて、出来の悪さに

苦笑してしまつ。

「わ、なの?」

「……やうなんですか」

「ふーん」

「……」

やつぱんじて貰えていない。

当たり前か、嘘なんだし。

嫁さんはさきひと言い訳がましい俺のこと軽蔑してくるんだろうな・。
・。

「・・・ま、いいか

そう言って嫁さんは俺の身体を優しく抱きしめてきた。

だから俺も嫁さんの細すぎる身体を優しく抱き返す。

「雪ひやん

「ん?」

「好き

「・・・ありがとう・・・」

本当はキスをしたかったけど、先程のことがあるのでそれは断念して嫁さんを

抱きしめたまま身体を逆方向へ反転させて、再び嫁さんを俺の身体の上に寝かせると

頭を撫でてあげる。

満面の笑顔を見てくれる嫁さん。やはりこの位置が一番落ち着く。

幸せな気持ちを噛みしめながら、俺たちは再び眠りについた。

裏切りの美德

2色目

『裏切りの美德』 5

・・・それでもやつぱり君がそんな顔をするのはとてもよくない」とだ。

夕方。ホテルから出てきた俺たちを出迎えたのは一人の男の遺体だった。

「げえっ！」

俺たちがいたホテルの目の前で倒れる同じ制服の男。この顔に俺は

見覚えがある。

えーっと・・・確か・・・

回想

「おい、弟塚」

声を掛けられたので顔を上げれば同じクラスの・・・えっと・・・

なんとか文則・・・?が俺の席の前に座っていた。

あれ、俺の前の席つて違う奴じゃなかつたっけ？

「なんだよ。俺今忙しいんだけど」

「金貸してくんない？今日、弁当忘れちゃって」

「悪い。俺、今月色々と厳しいから他人に貸す金は持つてないんだ」

「そつかー・・・残念。じゃあ他の奴に頼むわ」

そいつてなんとか文則は授業中にも関わらず部屋の中を歩き回つ、

クラスメートに金の無心をしていた。

(三色パン 2色目 「裏切りの美德2」 より抜粋)

回想終了

・・・そつだ、なんとか文則！何コイツこんなことひく？

「うつ・・・て・・・弟塚あ・・・」

「な・・・なんとか文則！しつかりしる」

慌ててなんとか文則に近付く俺。嫁さんはつまらないなって突っ立っていた。

「へへへ……せりれたぜ……お前の後を追つてきたら……

まさかこんな……」

「何で追つてきたんだよー授業どうした?」

「……俺……俺……実はお前のこと……ずっと……あ……

・
い……

「は?

「……て……た……つ……」

言葉を言つ終えると満足そうな表情で息を引き取るなんとか文則。

なんか最後の言葉を解読したくなにんだか、まさかこいつ

俺のこと……?

「……弟塚ああああ……」

「え?」

顔を赤らめているのも束の間、俺と嫁さんの前方に現れたのは見知らぬ女。

手にはナイフを握りながら左右に揺れながら徐々に近づいてくる。

何だこの女。俺たちのクラスにこんな奴いなかつたよな？・・・多分。

「あんた誰だ」

名乗りも無いので聞いてみると、女は素直に答えた。

「・・・帰桜 令明・・・」

・・・誰・・・?やばい、全然わからんねえ。

「弟塚ああ・・・。貴様ああ・・・!よくもあおお・・・

私のおおお・・・素敵羅ぐんをおおお・・・!男の純情をお

おお・・・

踏みにじりやがってええええ・・・!」

素敵羅?^{すてきら}?すてきら?^{ステキラ}?ステキヤラ?^{ステキヤラ}?捨てキヤラ・・・。

「うう……て……弟塚あ……」

「へへへ……やられたぜ……。お前の後を追つてきたり……。

まさかこんな……」

「……俺……俺……実はお前の」と……ずっと……あ……

・
い……

「……て……た……つ……」

「金貸してへんない? 今日、弁護されやがつて

回想終了

「そりだ! 素敵羅 文則! そりだ、それだよ! そりこいつが前だ
つたな、

あいつ

よかつた。これで俺のスーパー雲長くんが没収されずに済みそうだ。

「ははは、いやーよかつたー思い出して。な、嫁さん」

「？」

いきなり振られた嫁さんは意味が分からず首を傾げた。そりやそうだ。

でも俺はやつと心の中でモヤモヤしていたものが無くなつて今凄く

開放的な気持ちでとても清々しい。

だから忘れていた。自分たちの置かれている状況を。

ええええんだ yoooooooooooo

「！？」

いきなり咆哮といふか奇声を上げると勢いよく地面を蹴り上げて、

弾丸のよつな速さで俺たちの方へ飛んでくる帰桜。

武術の心得など何も持っていない俺はとりあえず逃げよつと思い嫁さんの腕を掴むが、

嫁さんの足がその場を離れよつとしない。

「嫁さん、逃げよつーーー。」

「・・・・・」

足がすくんでいるのだろうか。

人肉食つてゐるけど・・・やつぱ女の子なんだよな、嫁さん。

・・・なら俺は！――！

「嫁さんは俺が守る！」

なんの武器も盾も用意していながらそれでも俺は嫁さんをあの女から

守らなければいけない。

だからこのトカいだけの団体で嫁さんの盾にならなければ。

意を決して嫁さんの前に立つ。

田の前に迫つてくる帰桜。あのナイフ、果物ナイフかと思ったが結

構ゴツイ形を

している。

「くっ・・・」

刺されたら痛いのかな・・・。なんて弱気な心を愛の強さで握りつぶして立ちぬくす。

すべてでは嫁さんの命のため。

「・・・雲ちゃん・・・」

弱弱しい声で俺の名を呼ぶ嫁さんの声。

大丈夫、大丈夫だよ。俺が君を守るから。だから心配なんてしなくていい。

「・・・雲・・・ちゃん・・・」

背中から感じる嫁さんの温もり。こんな状況でも構わず俺に抱きつく俺の大切な嫁さんは、

やはり世界一可愛い。

俺は気持ちを引き締める。

例え自分がどうなろうが、嫁さんだけは必ず生きて家まで帰すんだ
！！！

「大丈夫……怖くない……！」

「……」

「……えいつ」

「……ん？」

力んでいた俺の身体。

その場で踏ん張っていた身体が後方から突然押された。そんな気がした。

・・・いや、押されたんだ。

だつて腹にナイフが刺さつてるもんね！

え――!――!――!――!――!――!――!

痛い、痛すぎる。どこぞの主人公みたいに「くつ！」なんてカツコいい台詞なんて

でないよー！

だつて今俺の腹に刃物がぐつさり刺さつて血が垂れて頭に血が登つて、

この状況を認めたくないけど腹が痛いからこれどう見ても現実でそれを実感したら

顔から熱が消えて顔面蒼白状態だし息も碌に吸えないしで・・・ああああああああ

ルーラー・ルーラー・ルーラー・ルーラー

これはきっと夢なんだと思い、霞んだ瞳で腹を見るとなイフが俺の腹の中に

しつかりとENしていた。

ああ、もうダメ。

Gamma Union

」・・・？」

腕も上げると血が出る。怖いから両手を必死に隠して瞳を瞑み
モードから

クリアモードへ変更して再度腹を見たてみたらやつぱり腹にはナイフが刺さっているが

刺している人間も何故か慌てていて、

よく見てみれば嫁さんの白くて細い華奢な手が帰桜の腕を握っている。

「よ・・・嫁さん・・・?」

「雲ちゅやんめんね」

「え?」

「私、刃で手を切るのが嫌だつたから」

「・・・」

成程。あー・・・うん、まあ俺はやつから自分で盾とか守るんだとか

言っていたからこの結果に文句は言わないことにしよう。

うん、例え俺が頑張ってナイフの刃を漫画みたいに手で受け止めようと思つて

たんだけど嫁さんの勝手で俺が人間鞠にされた、なんて微塵も思わ

ないんだからね！

「抜けないっ！…！」

帰桜が叫ぶ。先程から何度も腕を引ひつと試みているが全く動いていない。

嫁さんの表情からは読み解くことが出来ないが、相手がこんなに腕を動かそうとしても

ビクともしない

つてことは、実は結構な力で握っているのか？

「離せっつー！離せっつばー！」

「・・・了解」

そう呟くと嫁さんは空いた右腕をゆっくりと上に上げる。

「捕食」

声と共に振り下ろされる腕。同時に帰桜の腕も俺から離れる。

だがナイフは刺さったまま、帰桜の腕は肉体から切断されて宙に浮いていた。

・・え？まさかの手刀っすか？嫁さん。

「ひぎやあああああああああああああああああああああああああああ

ああーーー！」

一瞬の出来事で状況が理解できていなかつたのか10秒遅れでやつと叫びだす帰桜。

腕から放射される大量の血液が嫁さんの身体を赤く染めていた。

赤く染まつた手には小さな手製の鉈。

・・・ああ、思い出した。あれは俺たち3兄弟が君ヶ主3姉妹に恋をする前に

俺たちの親父が嫁さんのために作つてあげたとか言つていた手製の小型鉈だ。

サイズはカッターナイフ位の大きさだけど一般人が誤つて手を切つたら

5本指全部が削ぎ落されるといつトンデモ小型鉈。

まだ使つてたんだ、あれ。

「あつ・・・」

そういうえば親父の奴、このトンデモ小型鉈を作つてから数日後だつたかな・・・

親指すっぽり無くしてたんだよなー・・・。

あれきつとなんかの拍子で鉈を滑らじて切断しちゃったんだらうな。バ力な親父。

そんな昔の記憶を思い出しながら俺の身体は地面に向かって倒れだした。

「雲ちやん?」

嫁さんの声が遠くから聞こえるけど返事が出来ない。

「めん嫁さん・・・なんか俺・・・眠くなつて・・・せ・・・

花屋で買い物をしていたら誰かの悲鳴が聞こえた。

でも私には関係ない。誰がどうなるうが知つた事じゃない。

私は商店街を出であの子の居る所へ向かつた。

裏切りの美德

2色田

『裏切りの美德 6』

何を食べても美味しいなくて食べるのをやめたら私の身体はどうん
細くなつていつた。

私は食事を楽しいと思つた」どが一度も無い。何でみんなあんな熱い
味のないものを食べて笑つているのだろう。私は分からなかつた。

「そり・・・だから何も食べよつとしないんだ

「うと

「でもこのままじゃ、君は倒れてしまつよ？」

「それでも私は構わない

「君が倒れてしまつたら・・・僕たちはとても悲しい

「1」みんなさー

「謝りなくしていいよ。・・・うと、じゃあいつよつ

「？」

おじさんはそう言って手に持っていたナイフのようなもので自分の左にある

親指を切り落とした。

「おじさん？」

「食べてござらん。もし君がそういう子なら、僕たちもこれからは君に会つた食事を

用意する」といふ

—
•
•
•
—

差し出された指を何の迷いも無く口に入れる。だって、とてもおいしそうに

見えたのだもの・・・。

「学校を抜け出したと聞いて探してみれば・・・。

相変わらずやつてくれたわね、玄徳」

食事をしているとお姉ちゃんが彼氏を連れてやつてきた。

「お姉ちゃん」

「状況を確認したいのだけれど」

そう言つてお姉ちゃんは私の横で眠つてゐる雲ちゃんといひつきから
つるむ

女の方を見る。

「えつと・・・雲ちゃんが寝ちゃつた」

「子考、救急車を呼びなさい。まだ死んで無いだから」

「起きました、我が主」

「あと、セイの女が突然叫んでひき来た」

「セイの女つて・・・の子、あんたと同じ学年の子じゃなかつた
かしら?..

確かに同じ道場にいた気がしたんだけど・・・以前は覚えてないわね

「よく分かんないけど、やつちで倒れている男のことで雲ちゃんこ

ケンカ吹つかけてきたの。マジマジ」

私がさつきホテルから出てきたときには雲ちゃんが声を掛けていた男
の方を指差すと、

お姉ちゃんも顔をそつちへ向けた。

「……誰あれ？」

「知らない。雲ちゃんになんか話しかけていたみたいだけど、私、

早く帰りたから、何を喋っていたのか聞いてない」

「ふーん……あれば……放置しておきましょう」

お姉ちゃんの皿がまた倒れているの方へ向けられる。

「お姉ちゃん？」

「うーん、今思い出したのだけれど。

確かこの子、武術の才能は結構よかつた気がするのよねえ。

間違えていなければ数年前の大会で優勝していたはずよ」

「へー」

心底どうでもいい話を始めるお姉ちゃん。

でもお姉ちゃんの記憶の中に微かに届たつてことは、このナホツと
おねえちゃんの

タイプなのかも。

「お持ち帰つあるへ。」

「つふふふふふ・・・ビビしそうかなー・・・」

やつ言こつもいやいやしてくるお姉ちゃんは、結局この女をつりへ連れて帰つた。

あつといこの子も来週からお姉ちゃんの部隊の仲間入りだな・・・。

翌日、朝。

雲ちゃんは病院で入院しているから朝のお迎えは無く寂しく学校へ向かう。

途中までお姉ちゃんと一緒にたけど彼氏が来たから邪魔しちゃいけないと思つ

その場でお姉ちゃんと別れて一人早めに登校する。

雲ちゃんが居ないと寂しいよ・・・。

「・・・」

いつも以上に気持ちがダウンしていく。

こんな日は翼徳の身体に付いた匂いを全力で嗅ぐに限る。

「よし」

少しだけ気分を上げて教室の扉を開けた。

誰も挨拶しないクラスの中、いつもならすばやく声を掛けてくれるはずの翼徳の姿が無い。

「・・・?」

今日は遅刻でもしているのかな。そんな気持ちで席に着こうとしたら腕を掴まれる。

掴んだのは子龍。珍しく髪の毛に寝癖が付いている。

「おはよう、子龍」

「・・・玄殿・・・」

挨拶もしないで私の名前を呼べ子龍の姿を見て、胸の中で何かが疼きだしてきた。

「昨夜、翼徳が・・・」

「・・・どうしたの?」

分かつていてもその答えを自分が言いたくないから、意地悪して

子龍に聞いてしまう。

本当に・・・私はいつまでたっても最低な奴だな・・・。

「何者かに襲われ、手術を受けたのですが・・・」

「・・・」

子龍の長い前髪から見える顔色は真っ青だった。

そんな姿を見てしまった昔のことを思い出しきりに眩暈に襲われる。

それでも私は平静を装つ。

「セツ」

これから起きるであろうことを想像しながら私は子龍や仲間たちに何も言葉を掛けることなく、そのまま一時間目の授業も受けずに家に戻り

ベッドの上で眠つこついた。

夕刻、私が通うはずだった高校の前を通り。なんだか寂しい気分になつたけど

獲物を見つけた瞬間、そんなのどうでもよくなつた。

迷うことなく、私は捕獲作業に移る。

・・・あ、捕獲じゃなくて・・・、

・・・そう、これは狩猟だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4103ba/>

三色パン 2色目

2012年1月10日21時45分発行